

## 小学生を対象としたパラリンピック教育の可能性に関する検討 —リバースエデュケーション効果に着目して—

曾根 裕二

2019年11月6日受付 2020年1月8日受理

### Examination concerning the possibility of Paralympic education for elementary school students. —With a focus on the effect of reverse education—

Yuji Sone

#### Abstract

The purpose of this case study is to examine the effect of reverse education in Paralympic education. The subject of this study was third-grade students in a public primary school and their parents. Class sessions included one class session in which students practiced goalball, one of the Paralympic sports, and one class session in which students learned about the Paralympic. Question sheets were distributed to each household, and students who had attended the classes responded to open ended questions on the question sheets in their homes. The question sheet response rate was 52.5%. Received responses can be divided into the following six categories: “inclusive society and diversity”, “fun of playing goalball”, “respect for para-athletes”, “adapted physical activities”, “expectations for watching the Paralympic” and “anxiety and fear of not being able to see”. Individual categories contain aspects related to Paralympic Values that included <courage>, <determination>, <inspiration>, and <equality>. This finding indicates that the classes in this study correctly conveyed Paralympic values to the students. On the other hand, some students experienced anxiety and fear, indicating the necessity of reviewing the class contents. Opinions in the “others” category included not only teaching knowledge, and the class became an opportunity for the students’ families to engage in discussions held among different generations. This study suggest certain possibility of reverse education in Paralympic education.

キーワード：パラリンピック教育・リバースエデュケーション・ゴールボール

**Keywords:** paralympic education · reverse education · goalball

## I. 緒言

2017年に告示された中学校学習指導要領解説<sup>1)</sup>では、改訂に関する改善の具体的事項として「オリンピック・パラリンピックの意義や価値等の内容について改善を図る」ことが挙げられている。オリンピック・パラリンピックを題材とした教育については、一般的にオリンピック・パラリンピック教育と呼ばれることが多いが、オリンピックとパラリンピックが生まれた歴史的な経緯が異なる点も含めてパラリンピック教育には特別な配慮が必要であることも指摘されている<sup>2)</sup>。国際オリンピック委員会 (International Olympic Committee: 以下IOC) は〈Excellence: 卓越〉, 〈Friendship: 友情〉, 〈Respect: 敬意, 尊重〉をオリンピックの中心的な価値 (Olympic values) とし、オリンピック価値教育プログラム (OVEP) を展開している。一方、国際パラリンピック委員会 (International Paralympic Committee: 以下IPC)<sup>3)</sup>は目指すべきビジョンとして「Make for an inclusive world through Para sport」を掲げ、パラスポーツを通じた共生社会の実現に向けて、パラリンピックが持つ4つの価値 (Paralympic values), 〈Courage: 勇気〉, 〈Determination: 強い意志〉, 〈Inspiration: インスピレーション〉, 〈Equality: 公平〉を重視している。Paralympic Valuesについては、表1に詳細を示す。IOCとIPCはそれぞれの理念を実現させるために

それぞれ別の教育活動を推進している。このような背景を受けて、近年、パラスポーツの体験や学びが学習者にとってどのような効果があったのかを検討した研究が散見されるようになった。曾根<sup>4)</sup>は体育系の大学生を対象としてパラスポーツに関する授業を実施し、学生の障害に対する意識変容を導く可能性があることを報告している。同様に永浜<sup>5)</sup>は、大学生を対象とした実践を行い、スポーツ体験だけでなく、講義を実施することで大学生の障害者やパラスポーツに対する意識が肯定的に変化することを示した。宮本ら<sup>6)</sup>は実技と講義に加えて、障害者との交流体験を組み合わせることの必要性についても言及している。また、大山と新堀<sup>7)</sup>は小学生を対象として障害理解を目的としたスポーツ実技を行い、障害の捉え方が肯定的に変化したことを報告している。佐藤ら<sup>8)</sup>は、小中学校での福祉学習や総合的な学習という特別な時間での実践ではなく通常の体育の単元としての実施可能性を探っている。これらの研究に代表されるように、パラスポーツに関する授業を受けた児童、生徒、大学生が障害の理解を深め、肯定的なイメージに変化し得ることは明らかになりつつある。また、そのような理解の深まりや、イメージの変化のためには、パラスポーツの体験だけでなく、障害者との交流体験や知識を学ぶ講義も重要であることも示唆されている。

表1：パラリンピックの価値 (Paralympic Values)

勇気 (COURAGE)	マイナスの感情に向き合い、乗り越えようと思える精神力
強い意志 (DETERMINATION)	困難があっても、諦めず限界を突破しようとする力
インスピレーション (INSPIRATION)	人の心を揺さぶり、駆り立てる力
公平 (EQUALITY)	多様性を認め、創意工夫すれば、誰もが同じスタートラインに立てることに気付かせる力

日本障がい者スポーツ協会ホームページより作図

一方、パラリンピック教育についてはIPC公認のパラリンピック教育教材として、I'm POSSIBLEが開発されている。この教材の日本語版も2017年に公開され、全国の小中学校および特別支援学校の小中学部への配布も行われており、今後の教育現場での実践が積み重ねられていくことが期待されている<sup>9)</sup>。また、パラリンピック教育については子どもたちがパラリンピックに関する学びを深めるだけでなく、学校で学習した児童・生徒を通じて家庭での教育効果を高める「リバースエデュケーション効果」も期待されている。リバースエデュケーション効果については、2017年2月に当時のIPC会長であったフィリップ・クレイバン氏が来日した時の会見において「パラリンピック教育は、素晴らしいパラリンピアンたちの能力を若い人たちに深く知ってもらい、価値を理解してもらうことで、彼らが

家に帰り、自分の親や祖父母に伝えていく『リバースエデュケーション』だと考えている。通常は、大人が子どもに伝えていくものであるが、このパラリンピックムーブメントの素晴らしいさは、若者が教師になることだ。次世代に『彼らが決意を持ってやれば何事も可能である』と学んでほしい」と語っている<sup>10)</sup>。

先述の通り、パラスポーツを教材とした授業実践の報告は積み重なってきているが、授業を受けた児童・生徒が兄弟や保護者に授業での学びをどのように伝えるのか、リバースエデュケーションの視点での研究は見当たらない。授業を受けた児童・生徒の学びだけでなく、児童・生徒を通して、保護者や家族がどのような学びの機会を得ることができるかを明らかにすることは共生社会の構築という観点からも重要であると思われる。そこで本研究では、パラリンピック教育におけるリ

バースエデュケーション効果について、事例的に検討することを目的とする。

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象

文部科学省<sup>11)</sup>によると小学校低学年の重視すべき課題として、善悪の判断や規範意識の基礎の形成が挙げられている。また、高学年の時期は発達個人差などが大きくなり、自他の尊重の意識や他者への思いやりなどを育てることが重要な課題とされている。本研究で扱うパラリンピックが共生社会の実現を目指していること等を踏まえ、小学校高学年で課題となる自他を尊重する意識を育む土台作りの規範意識を作るという意味で、低学年から高学年への移行期である中学年を対象にすることとした。本研究の対象は公立A小学校の第3学年に在籍する96名の児童ならびにその保護者である。

### 2. 教材としたパラリンピック競技の選定

2020年パラリンピック東京大会では22競技の開催が決定しているが、今回の実践では、

対象となった小学校の教員と協議の上、用具をそろえるのが比較的簡便であり、接触プレーなどの危険も少ないことが予想される「ゴールボール」を取り扱うこととなった。ゴールボールとは、アイシェード（目隠し）を着用した1チーム3名のプレイヤー同士が、コート内で鈴入りボール（1.25kg）を転がすように投球し合って味方のゴールを防御しながら相手ゴールにボールを入れることにより得点し、一定時間内の得点の多少により勝敗を決するものである<sup>12)</sup>。

### 3. 具体的な授業内容

本実践は201X年10月に実施された。対象となるA小学校の第3学年は3クラスあり、2時間目から4時間目にかけて、クラス毎にゴールボールの実技体験を行った。給食を挟み、5時間目に学年全体に対してパラリンピックに関する講義を行った。実技、講義ともにIPC公認のパラリンピック教材「I'm POSSIBLE」の内容を参考にして構成した。以上、実践当日の時間割を表2に、授業略案を図1、図2に示す。

表2：実践当日の時間割

2時間目	9:30～10:15	ゴールボール体験	1組：33名
3時間目	10:35～11:20	ゴールボール体験	2組：32名
4時間目	11:25～12:10	ゴールボール体験	3組：31名
5時間目	13:45～14:30	講義	1～3組

	学習内容	指導上の留意点・支援	備考
導入 (10)	集合、挨拶 アイマスクを受け取る アイマスクをつける	あいさつ、活動の説明 恐怖心のある児童には無理に付けさせない	3人一組のチームごとに整列する 目が見えない時は音の情報が必要なことを知る → 静かにする必要がある
	使用するボールの音を聞く ルールの概要を知る	ボールを振って鈴の音を聞かせる 実技を交えながらゴールボールの概要を説明する	
展開 (30)	ゲーム中の約束事を確認する ・ゲーム中は静かにする ・投げる時は「行きます」の掛け声	<ルール確認> 攻撃時は「行きます」の掛け声 攻撃時はアイマスクを外す 全力で投げずにコースを狙うようにする 3人投げたら攻守交替する	掛け声等、できていない児童には、反則を取るのではなく、口頭で助言する
	第一試合 A1班とB1班はアイマスクをする 試合のない班が順番に補助係 5班、6班は応援 以降順番に	ゲームをするチーム 他チームから補助員 ・コートまで選手を誘導する。実況係 ・「お静かに」パネルをもって必要な時に提示する得点係 ・ボール拾い係	
まとめ	あいさつ 簡単なまとめ	ここでは、結論を言うのではなく 午後の学習に向けて問いを出す	

図1 授業（実技）の指導略案

	学習内容	指導上の留意点・支援	備考
導入 (15)	集合、挨拶 クイズ形式でゴールボールについて理解を深める	スライド、ビデオを見ながら、ゴールボールについて復習する 「道具の工夫」「ラインの工夫」「応援の工夫」	(ビデオ、約3分)
	クイズ形式で視覚障がい者のスポーツについて理解する ・水泳 ・自転車 ・マラソン、サッカー、柔道について知る	・水泳のタッピングバーに関するクイズ ・タンDEM自転車に関するクイズ ・視覚障がい者のスポーツについて、ルールや工夫を説明しながら進める	
展開 (30)	パラリンピックを知る	グットマン博士の言葉を例に出し、障がい者のスポーツで大切にしていることを伝える	「失われたものを救えるな、残されたものを最大限に活かせ！」
	肢体不自由者のスポーツについて理解を深める	クイズ形式と動画を使って説明する障がい者のスポーツをやるための工夫について、児童に問いかけながら進行する	視覚障がいだけでなく、肢体不自由者も同じ考え方で、スポーツを楽しめる
まとめ	まとめ 感想を言う	パラリンピックのダイジェスト動画(3分程度)を見て、様々な工夫や配慮を学び、日常生活でもそのような考え方ができるように・・・ 時間があれば感想を聞く	ビデオを見ながら、大事なところは解説を入れる

図2 授業（講義）の指導略案

#### 4. リバースエデュケーション効果の検討

各家庭にアンケートを配布し、対象児童が下校後に家庭でどのような内容を伝えたかを自由記述で回答させた。アンケートは授業後1週間を目途に各担任へ提出するよう対象者へ依頼した。

回収された自由記述のアンケートについては、KJ法<sup>13)</sup>の手順に含まれる4つのステップのうち、ラベル化（単位化）とカテゴリー化（統合化）の手法を用いて分析を行った。作業に当たっては、偏ったカテゴリーとにならないように、アダプテッド・スポーツを専門とする大学教員とそのゼミ生により、記載された内容を一つずつ確認しながら実施した。カテゴリー化されたものは、再度内容を確認しながら各カテゴリーの名前を決定し比較検討を行った。

また、自由記述のアンケートの回答において、リバースエデュケーションの視点に基づき、児童が家庭で伝えた内容から保護者をはじめとする家族がどのような学びを得たかについて、家族が新たに学んだことや考えたこと等に関する記述を抽出した。

#### 5. 倫理的配慮

アンケートの実施に当たっては、保護者会などで直接説明する機会を持つことができないため、文書により、研究の意義、個人が特定されることはないこと、回答は任意であること、回答内容によって児童や保護者が不利益を被ることがないこと等を説明した。その上でアンケートへの回答、提出をもって同意を得たと判断し、研究を進めた。

### Ⅲ. 結果

アンケートは53名の保護者から提出され、回収率は55.2%であった。ゴールボールのルールに関する回答は53名中、25名(47.2%)であり、種目やルールについて「初めて知った」という回答は14名(26.4%)であった。ルールの詳細に関する回答もあったが、間違った内容や一部曖昧な内容が伝わっているケースも少なからず見られた。

自由記述による回答内容をKJ法の手法を用いて精査した結果、授業を受けた児童が家庭

で伝えた内容について6つのカテゴリーに分類することが可能であった。それぞれ『共生社会・多様性』に関する回答が22件、『ゴールボールの楽しさ』に関する回答が22件、『パラアスリートへの尊敬』に関する回答が14件、『ルール上の工夫』に関する回答が8件、『見えないことへの不安・恐怖』に関する回答が6件、『パラリンピック観戦に対する期待』に関する回答が6件であった。以上、図3に示す。加えて、各カテゴリー、ならびに代表的な回答について表3に示す。

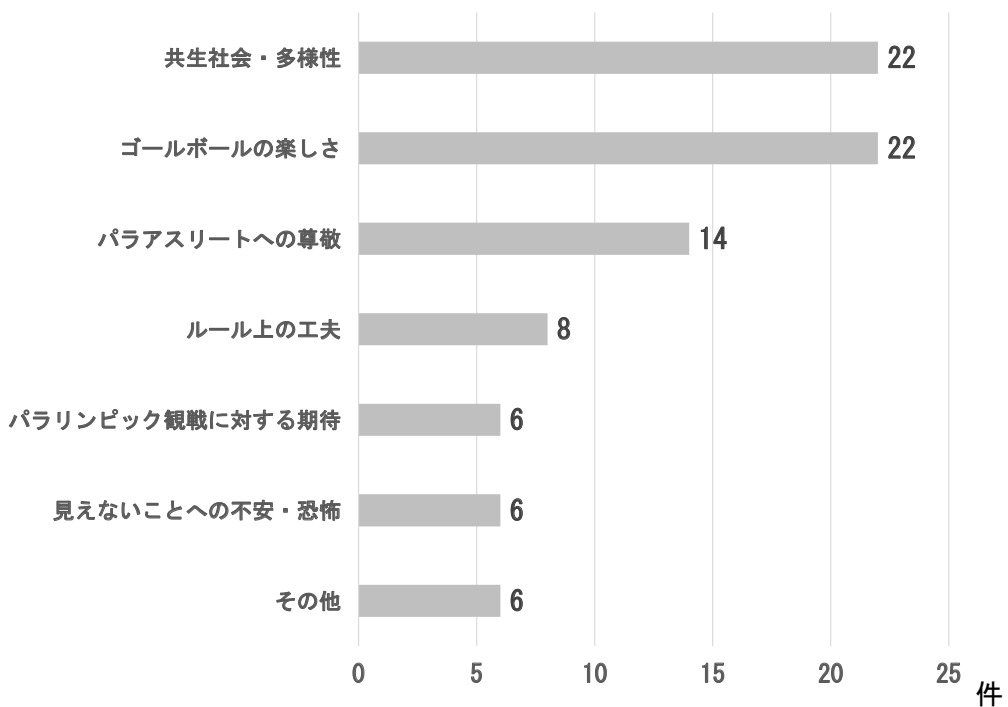


図3 児童が家庭で伝えた内容

表3 児童が家庭で伝えた内容について（自由記述）

カテゴリー	代表的な回答
共生社会・多様性	<ul style="list-style-type: none"> <li>世の中には色々な人がいて、自分よりできない人ととらえたりしないことが、母にとって一番嬉しかったです。</li> <li>自分と違うというだけで怖いと思いがちですが、それも1つの個性であるとならえ、一緒にできるスポーツ等を楽しめたのは良い経験だと思います。</li> </ul>
ゴールボールの楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に体験してみて顔にボールが当たってしまって痛かったけど、楽しかったこと、目の見えない人でもこういうスポーツをできてすごいと教えてくれました。</li> <li>アイマスクをつけるととても不安だったこと、目が見えない分耳でいつもよりよく周りの音を聞き、ボールの鈴の音をちゃんと聞いて、ゴールでボールを止められたことがとても嬉しかったそうです。</li> </ul>
パラアスリートへの尊敬	<ul style="list-style-type: none"> <li>障害があっても、スポーツに挑戦して世界で戦える人々の心の強さに息子は感銘を受けていました。</li> <li>映像で見たという他のパラ競技のことも驚きをもって憧れを感じた様子で話ってくれました。</li> </ul>
ルール上の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>障害があっても工夫することで何でもできることが学べるのが、パラリンピックだと感じました。</li> <li>その競技を成功させるためにプレイヤー、スタッフ、観客、皆に工夫が必要だと分かりますね。</li> </ul>
パラリンピック観戦に対する期待	<ul style="list-style-type: none"> <li>子供は普段テレビでスポーツを全く観ないのですがパラリンピックは観たいと話していました。</li> <li>東京パラリンピックの競技を観に行きたい！と言っていたので、何か入手できて実際に観に連れて行ってやりたいと思います。</li> </ul>
見えないことへの不安・恐怖	<ul style="list-style-type: none"> <li>視覚を制限されることへの不安からのスポーツは自分は何も出来なかったと話してくれました。</li> <li>アイマスクをして、鈴の入ったボールゲームをしたが難しかった。目が見えないことは大変だ。目が見えることはありがたいと思った。</li> </ul>

また、カテゴリーに分類することは困難であったコメントもあり、それらは『その他』とした。例えば、「今日の授業をきっかけに親子でたくさん話をしました。」、「子供からゴールボールのルールの説明を受け、今まで知らなかったゴールボールへの理解を親子共に深

めることが出来ました。」等であり、パラリンピック教育の授業をきっかけに、家族での対話が生まれた（深まった）。という回答も散見された。以上、カテゴリーへの分類困難であった『その他』の回答例について表4に示す。

表4 児童が家庭で伝えた内容について（その他の回答）

6つのカテゴリーに当てはまらない回答
<ul style="list-style-type: none"> <li>今日の授業をきっかけに親子でたくさん話をしました。</li> <li>話しているところに、中学生の兄が帰ってきて、僕はブラインドサッカーを体験したと話が盛り上がってました。</li> <li>子供からゴールボールのルールの説明を受け、今まで知らなかったゴールボールへの理解を親子共に深めることが出来ました。</li> <li>目の不自由な人だけでなく、みんなでするといいねと親子で話していました。</li> </ul>

リバースエデュケーションの視点に基づき、児童の話から保護者、家族が新たに学んだこと、考えたこと等に関する記述を抽出した結果、「親子ともにゴールボールのルール等の理解を深めることができた」や「工夫することのすばらしさが分かった」という内容の記述があった。家族の学びについて代表的な回答を表5に示す。

#### IV. 考察

本研究ではパラリンピック教育について、学校での授業内容を家庭でどのように伝えたかという視点から授業を受けた児童ではなく、児童の保護者へのアンケートを実施した。児童が家庭で伝えた内容として、『共生社会・多様性』『ゴールボールの楽しさ』『パラアスリー

トへの尊敬』『ルール上の工夫』『パラリンピック観戦に対する期待』『見えないことへの不安・恐怖』の6つのカテゴリーに分類することができた。

#### 1. パラリンピック教育の教材としてのゴールボール

本研究におけるパラリンピック教育実践では道具の簡便性、安全性などを考慮し、ゴールボールを教材として用いた。本研究と同様に小学生にゴールボールの実践を行った大山<sup>14)</sup>の研究では実践の前後で障害者に対するネガティブなイメージが薄れたことを報告している。本研究においては『見えないことへの恐怖・不安』を訴えた児童に比して、『ゴールボールの楽しさ』を家庭で伝えた児童が多く、ゴールボールはポジティブな印象を与え

表5 家族の新たな気づきに関する記述

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ その競技を成功させるためにプレイヤー、スタッフ、観客、皆に工夫が必要だと分かりますね。</li> <li>・ 子供からゴールボールのルールの説明を受け、今まで知らなかったゴールボールへの理解を親子共に深めることが出来ました。</li> <li>・ 子供の感想の中に「障害もいろいろあるけれど、やれることは(健常者と)同じだということが分かった」とありました。まさしくこの感想の通りで私達(保護者)が変に気を遣わず普通に接し、普通に応援することが大切なのだ改めて思いました。</li> <li>・ ルールも知らないとが多く、良い機会なので大人も体験できればと思いました。</li> <li>・ 目の不自由な人と目が見える人がアイマスクをすることで同じ状態になりプレイできる。「それって凄いなと思いました。」</li> <li>・ 目が見えなくても出来るスポーツがいくつもある事を初めて知り、驚き、勉強になりました。</li> <li>・ アイマスクというルールを通じて、またスポーツを通じてバリアフリーな世の中を考えていければいいなと思います。</li> <li>・ 障害があっても工夫することで何でもできることが学べるのが、パラリンピックだと感じました。</li> </ul> |
|---|



やすいことが確認できた。本研究では、介入前後での比較を行っていないが、大山<sup>14)</sup>の研究と同様の傾向を示している可能性があることが推察された。また、表3に示した通り、「実際に体験してみて顔にボールが当たってしまっただけで、楽しかった」、「目の見えない人でもこういうスポーツをできてすごいと教えてくれました」、「アイマスクをつけるととても不安だったこと、目が見えない分耳でいつもよりよく周りの音を聞き、ボールの鈴の音をちゃんと聞いて・・・」という回答があり、ネガティブなイメージを持ちつつも、それを乗り越えることの意義、その為の工夫についても言及していたことは、パラリンピック教育の可能性を示した具体例であると考えられる。

一方でゴールボールのルールについては、間違った内容を理解し、家庭で伝えた児童がいたり、『見えないことへの恐怖・不安』を伝えたりする児童も少なからずいた。本研究における授業実践では全ての児童がゲーム形式でのゴールボールを楽しむことを目的の一つとし、ゲームの時間を確保するために、ルール説明についてはゲームを行う上で必要最低限のことを簡単に伝えたのみであった。また、西館ら<sup>15)</sup>は、アイマスク等を使用する視覚障害の疑似体験では、多くの参加者が不安や恐怖を口にすることを示し、体験の難易度の設定、方法等に関する事前の十分な説明の必要性を述べている。本研究においても、児童の

不安を軽減するための配慮や事前説明、ルールの確認などを丁寧に行う必要性がうかがわれた。

## 2. リバースエデュケーションの可能性

リバースエデュケーションに関する明文化された定義は見当たらない。スポーツ庁の報告<sup>2)</sup>では、「児童生徒がオリンピックやパラリンピックに直接接する機会を設けることは、教育上有意義かつ効果的と考えられ、児童生徒を通じて家庭での教育効果を高めることとなる「リバースエデュケーション効果」が期待されることを踏まえれば、東京大会に向けて、汎用性のある仕組みを整備することが必要である。」と記されている。従って、本研究ではリバースエデュケーションを「児童・生徒が学校での学びを家庭に持ち帰り、家庭の中で世代を越えた新たな学びが生まれること」と捉えたい。

『共生社会・多様性』のカテゴリーでは「世の中には色々な人がいて、自分よりできない人ととらえたりしないことが、母にとって一番嬉しかったです。」という回答に代表されるように、家庭内で共生や多様性に関連した話題が子どもから発信されるということが保護者自身も新鮮な驚きであったことがうかがえる。また、「自分と違うことを一つの個性である」ととらえ」というコメントにもある通り、障害を能力の有無ではなく多様性と捉えることができていることも注目すべき点であろう。

緒言にも記した通り、IPCは目指すべきビジョンとして、パラスポーツを通じた共生社会の実現を掲げている<sup>3)</sup>。本研究においてゴールボールを教材としたパラリンピック教育を受けることで、視覚に障害があっても一緒にスポーツを楽しめる、障害も一つの個性であるということを実感し、家庭で伝えたことは意義の深いことであると考えられる。

『ゴールボールの楽しさ』のカテゴリーでは「痛かったけど楽しかった」、「目の見えない人でもスポーツができてすごい」、「不安だったけど、目が見えない分、周りの音をよく聞いた」等の回答が得られた。ゴールボールはアイマスクを装着し、視覚情報を制限するという状態になるため、不安感や恐怖感などを持ちやすいと想像できるが、その困難さを乗り越えたことで、ネガティブなイメージだけでなく、肯定的なイメージを持つことができたことと推察される。これはIPCが掲げるParalympic Valuesの〈勇氣〉〈強い意志〉をゴールボールを通して体感し、家庭で伝えたものと考えられる。同様に『パラアスリートへの尊敬』のカテゴリーでは「障害があっても世界で戦える心の強さ」「パラ競技に対して驚きと憧れを感じた」という回答があり、〈勇氣〉〈強い意志〉に加え、〈インスピレーション〉を受けた内容を家庭で伝えたものと考えられる。

『ルール上の工夫について』のカテゴリーでは「障害があっても工夫することで何でもできる」「競技を成功させるためにプレイヤー、

スタッフ、観客、皆に工夫が必要」という回答があり、Paralympic Valuesの〈公平〉に該当する内容であると考えられる。パラスポーツは、障害のあるプレイヤーが行うため、その実施にあたっては様々な工夫が見られる。本研究において取り扱ったゴールボールでは、ボールの中に鈴を入れ、音によりボールの位置、軌道を認識できるような工夫がなされており、同様にパラリンピックの正式種目であるボッチャでは重度の肢体不自由者が参加できるように、ランプと呼ばれる勾配具を利用しての投球が認められている。このように、プレイヤーの状況に合わせてスポーツのルールや道具を変更、工夫することをアダプテッド・スポーツと言う<sup>16)</sup>。ゴールボールをはじめとするパラスポーツには、このアダプテッド・スポーツの視点が盛り込まれているため、授業を受けた児童自身が〈公平〉の価値に気が付いたものと推察される。

本研究では、児童が家庭で伝えた内容を6カテゴリーに分類することを試みたが、分類困難であった回答の中に「親子でたくさん話をしました」、「中学生の兄と話が盛り上がっていました」等のコメントがあった。パラリンピックに関する授業を通して、家庭内での対話が深まっている様子が見えてきた。リバーズエデュケーションとは、単に学校での学びを家庭において知識として伝えることのみを言うのではなく、保護者、兄弟など世代を越えた新しい学びを創出することと捉えると、

パラリンピックを題材に対話が始まる、深まることは非常に重要であると考えられる。また、表5にあるように、パラリンピック教育を受けた児童から、家族が新たに学んだこと、考えたことに関する直接的な回答もいくつか見られた。ゴールボールという競技そのものを新しく知ったという知識や経験に関するものもあったが、パラリンピックが目指す共生社会につながるような回答もあった。共生社会について、文部科学省<sup>17)</sup>は「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。」と述べている。本研究で得られた家族の学びに関する回答例にある「私達（保護者）が変に気を遣わず普通に接し、普通に応援することが大切なのだと改めて思いました」という回答からは、障害者を特別な存在としてではなく、当たり前存在として接することの大切さを再確認していることがうかがえる。このことは人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会と同様の内容を指していると推察される。他にも「障害があっても工夫することで何でもできることが学べるのが、パラリンピックだと感じました」や「その競技を成功させるためにプレイヤー、スタッフ、観客、皆に工夫が必要だと分かりますね」という回答からは、パラリンピックの価値のうち〈公平〉に関する内容を児童の話から学んだと捉えることも可能であろう。

### 3. 本研究の成果と課題

リバースエデュケーションに関する報告はこれまでに見られないことから、本研究において、児童が家庭で何を伝えるのか、その一部が明らかになったことは意義のあることであると考えられる。しかしながら、今回は自由記述でのアンケートであり、詳細な検討はできておらず、リバースエデュケーション効果と言い切れるには至っていない。加えて、家庭において授業内容を聞き出す方法を統制する手続きも行っていないことから、誘導的にコメントが導き出されている可能性も否定できない。今後、詳細を検討していくにあたっては、家庭との連携を密に取りながら研究を進める必要がある。また、ゴールボールのルールについても誤った伝わり方をしていたり、不安感や恐怖心を強く感じたりした児童もおり、授業内容や授業時間、質問項目などについては、十分な協議が必要であろう。

### V. まとめ

本研究ではゴールボールを教材としたパラリンピック教育を受けた児童が、家庭で何を伝えるのか、アンケート調査により検討した。その結果、Paralympic Valuesに含まれる内容を伝えている例が多かった。また、知識の伝達だけにとどまらず、家庭内での対話のきっかけとなり得ることが示唆された。

## 〈引用文献〉

- 1) 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編。（2017）.
- 2) スポーツ庁：オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて 最終報告。（2016）.
- 3) IPC ホームページ：https://www.paralympic.org/ipc/who-we-are（2019年10月31日閲覧）
- 4) 曾根裕二：アダプテッド・スポーツの体験が体育専攻学生の障害理解に及ぼす影響. 大阪体育大学健康福祉学部研究紀要, 13：53-62, 2016.
- 5) 永浜明子：アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告(第Ⅱ報) —アダプテッド・スポーツ導入に向けた自己評価の観点から. 大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門, 60(2)：31-44, 2012.
- 6) 宮本彩・元嶋菜美香・元安陽一ら：スポーツを専攻する学生のためのアダプテッド・スポーツ教育の充実をめざして. 長崎国際大学教育基盤センター紀要, 1：81-89, 2018.
- 7) 大山祐太・新堀京花：小学生の障害理解を目的としたアダプテッド・スポーツ授業の開発. アダプテッド・スポーツ科学, 16(1)：7-20, 2018.
- 8) 佐藤敬広・植木章三・鈴木宏哉 ほか：障害のない児童・生徒におけるアダプテッド・スポーツ教育の有用性の検討—ソーシャルスキルおよび心理的・身体的側面の変化に着目して—. 2015 笹川スポーツ研究助成：326-335, 2018.
- 9) 東京2020 ホームページ：https://education.tokyo2020.org/jp/teach/texts/iampossible/（2019年10月31日閲覧）
- 10) パラサポweb（2017年2月22日の記事）：https://www.parasapo.tokyo/topics/2143（2019年10月1日閲覧）
- 11) 文部科学省：子どもの徳育に関する懇談会「審議の概要」3. 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題.（2009）.
- 12) 一般社団法人日本ゴールボール協会ホームページ：http://www.jgba.jp/goalball.html（2019年10月1日閲覧）
- 13) 川喜多二郎：発想法. 中央公論社, 東京（1970）.
- 14) 大山祐太：小学生を対象としたアダプテッド・スポーツ授業の効果の検討—ゴールボールを教材として—. 北海道教育大学紀要 教育科学編, 66(2)：253-262, 2016.
- 15) 西館有沙・水野智美・徳田克己：地域で実施されている福祉体験講座の問題点と改善点の提案：視覚障害補講体験と車いす体験に焦点をあてて. 障害理解研究, 17：1-16, 2016.
- 16) 植木章三・曾根裕二・高戸仁郎 編：イラスト アダプテッド・スポーツ概論. 東京教学社, 東京（2017）.
- 17) 文部科学省：共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）.（2012）.